

<原著> 第40回 日本赤十字社医学会総会 優秀演題

## 卒後1～3年目看護師の災害看護への認識調査

仙台赤十字病院 看護部

鈴木由美 原 玲子

### A report of an investigation on the understanding of disaster nursing among nurses, within three years after graduation

Yumi SUZUKI, Reiko HARA

*Department of nursing, Japanese Red Cross Sendai Hospital*

**Key words:** 赤十字看護師, 災害看護, 災害看護教育計画

#### I. はじめに

宮城県では今後30年以内に高い確率で宮城県沖を震源とする大地震が起こると予測され、地震や津波による被害想定も報告されている。1995年の兵庫県南部地震をきっかけに災害看護の必要性が看護界に強く意識づけられてきた。2004年の新潟県中越地震発生以来、看護師の災害看護教育のあり方が再検討され、災害看護教育に関する議論が活発に行なわれている。しかしながら、災害看護教育は各施設に任されている現状であり、研修・訓練計画を確立できていないところが少なくない。

本研究は、災害看護教育計画の基礎資料とするため、災害看護に対する看護師の認識傾向を把握することを目的とした。

#### II. 研究方法

1. 対象：A病院 平成16年度卒後1～3年目看護師91名（卒後1年目34名，2年目26名，3年目31名）
2. 調査期間：2004年6月10日～14日
3. データ収集方法：自記入選択式質問紙法

質問項目は、属性（年齢・看護職経験年数・看護基礎教育背景）と、災害看護への認識内容とし、日本赤十字社の「救護員としての赤十字看護師研修実施要項（赤十字概論・災害看護

論・日本赤十字社救急法）」<sup>1)</sup>を参考に、独自に作成した。内容は、属性、看護基礎教育課程時の災害看護研修体験の有無、災害看護研修の必要性に関する認識、防災対策に関する日常的準備状況と心構え、災害看護用語の知識、災害看護活動への関心の全6領域・25項目とした。

4. データ分析方法：日常的準備状況と心構えについては「思う」～「思わない」、災害看護用語の知識については「知っている」～「知らない」の4段階で回答を求めた。比較は「知っている・少し知っている」の「知っている」群と、「知らない・あまり知らない」の「知らない」群の2群に区分して単純集計し、全体傾向と経験年数別に比較した。統計的解析は $\chi^2$ 検定を用いた。

倫理的配慮：質問紙は無記名とし、研究の主旨、方法、回答は全体で統計処理し個人名が特定されないこと、協力の自由意志、協力の有無により不利益を受けないこと、匿名性の保障、プライバシーの保護等について記載した依頼文と質問紙を同封して配布し、返信をもって研究同意とみなした。

#### III. 結果

##### 1. 対象の背景

回答数82名（回収率89.1%・有効回答率100%、卒後1年目32名・2年目21名・3年目29

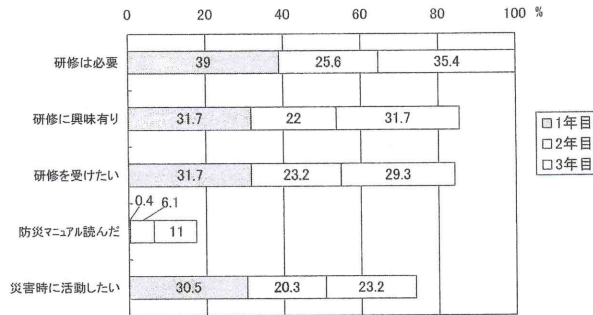


図1 「災害看護研修に関心あり」の経験年数別比較

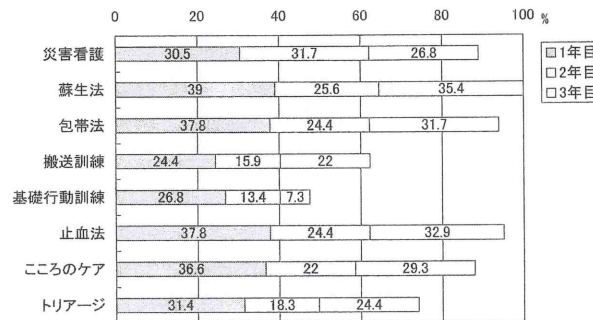


図3 「災害看護用語を知っている」の経験年数別比較

名), 平均年齢 $22.6 \pm 1.4$ 歳であった。看護基礎教育背景は, 大学12名, 短大21名, 専門41名, 2年課程8名であった。看護基礎教育課程時の災害看護研修経験有りは37名(45.1%)であり, すべて赤十字系看護学校卒者であった。

## 2. 災害看護への認識

1) 災害看護研修の必要性に関する認識について(図1)

災害看護に関する研修についての認識は「災害看護に関する研修が必要である」との回答が82名(100%)であった。「災害看護に関する研修に興味がある」70名(85.3%), 「災害看護に関する研修を受けたい」69名(84.1%)であった。また, 「災害救護活動に参加したい」は61名(74.4%)で, 災害看護に関する研修に対して肯定的反応が多かった。それに対して, 「災害防災対策マニュアルを読んだことがある」は25名(30.5%)と低く, 日常的な準備はあまり行なわれていない結果であった。経験年数別では差がなかった。

2) 防災対策に関する日常的準備状況と心構えについて(図2)

日常的に防災対策として準備しているもの・

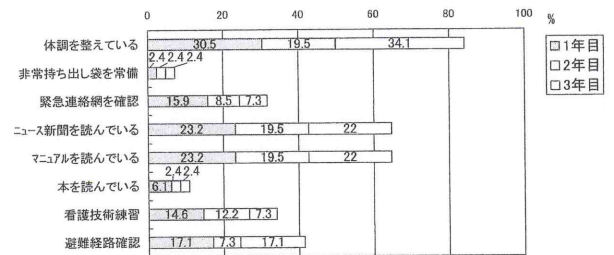


図2 「災害時に備えて日常的に心がけていること」の経験年数別比較

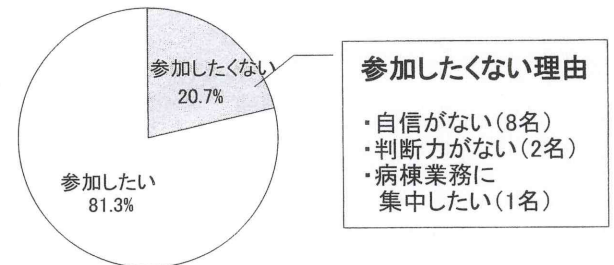


図4 災害看護活動への参加に対して

心がけていることは「日頃から体調を整えている」69名(84.1%)が最も多く, 次いで「ニュース・新聞を見ている」53名(64.6%), 「病院や自宅の避難経路を確認している」34名(41.5%), 「登院時の緊急連絡網を確認している」26名(31.7%)の順であった。しかし, 「非常持ち出し袋を常備している」はわずか7名(7.3%)であった。経験年数別では差がなかった。

3) 災害看護用語の知識について(図3)

災害看護の各用語の認識については, 「知っている」との回答は, 「災害看護」63名(76.8%), 「蘇生法」82名(100%), 「包帯法」78名(95.1%), 「止血法」78名(95.1%), 「こころのケア」72名(87.8%), 「トリアージ」63名(76.8%)であった。

また, 「知らない」の回答の方が多かったのは「搬送訓練」37名(45.1%), 「基礎行動訓練」54名(65.9%)であった。経験年数別では差がなかった。

4) 災害看護活動への関心について(図4)

災害看護研修・活動への参加に対しては「災害看護研修に興味がある」との回答が70名(85.4%), 「災害救護活動に参加したい」が62名(75.6%)と, 災害看護に関する研修・活動に対して肯定的反応が多かった。経験年数別で

は差がなかった。

「災害救護活動に参加したくない」との回答は17名(20.7%)であったが、その理由の記述内容は、「災害時の自分の行動・判断に自信がないから」(8名)、「緊急時・混乱期にどのように行動するべきか判断力がないから」(2名)、「今は病棟業務に集中したいから」(1名)であった。

#### IV. 考 察

1995年の兵庫県南部地震や2004年の新潟県中越地震を教訓に、いつ起こるか予測できない大地震に備えて、病院に勤務する看護師として防災対策を考える状況になってきている。TV等のメディアによって災害状況がイメージされはじめ、看護ボランティアをはじめとする災害ボランティアの活動の意義も多くの人々の知るところとなり、「大地震が起きたらどうなるのだろう。」という不安とともに、病院等に対しては、災害時の活動への期待がますます高まってきている。

また、最近では行政による防災対策の準備・訓練が進んでおり、赤十字病院に限らず、救護班や災害時医療派遣チーム Disaster Medical Assistance Team (DMAT) 等の編成をおこなっている。地域住民の自助と共助による迅速な対応が救援や復興につながり、日ごろの備えが必要不可欠といわれ、赤十字病院も赤十字の使命・地域への貢献という理念に基づき、災害時の医療・看護について真剣に考え、準備を進める必要がある。

しかしながら、災害看護教育は各施設に任されている現状であり、研修・訓練計画を確立できていないところが少なくない。災害看護に関する認識調査の報告や災害基幹拠点病院に勤務する職員の役割認識に関する研究など、これまでもさまざまな視点で報告され、病院という組織における防災対策・災害時の備えとしての取り組みが報告されてきた。しかし、看護師への災害看護教育プログラムに関する研究はあまり報告されていない。浅海ら<sup>2)</sup>は「実践に結びつくような技術がより多く習得できるような講義

内容の見直し、院内で開催している ACLS や日本赤十字社救急法講習などの研修参加をすすめて、継続して学びを深めていけるような関わりが必要である。」と述べている。

看護師として経験を重ねても、災害時に的確・迅速に対応することは難しく、また、いつ災害が起こるか分からない危機感がある。山田ら<sup>3)</sup>は「職員の知識不足、経験不足が多くの問題を生み、これらが職員の自信のなさに繋がっていると推測する。これらは、シミュレーションの実施、学習会の開催、災害看護マニュアルの整備などで解決されるものであると考える。」と述べている。また、太田ら<sup>4)</sup>は「今後、訓練を有効なものにするために、災害医療に関する知識や災害看護の役割といった学習を行い、訓練参加に際し動機付けを行っていくことが必要と考える。」と述べている。

本研究では、卒後1～3年目看護師が災害看護に関する研修・活動に高い関心を持っていることが明らかとなったが、一方で、個人としての防災対策をおこなっていないことがわかった。徳川ら<sup>5)</sup>は「災害看護体験を持つ看護職がその体験を活かして有効な役割を果たすには、災害看護への意識面での変化を行動面にまで移せるサポート、たとえば『啓蒙活動』『訓練』『災害時の救護活動への参加の保障』などが必要である。」と述べている。

今後、看護師が抱いている災害看護に対する具体的内容を明確にし、災害看護のイメージトレーニングが必要となる。また、危機意識を高め、災害看護への動機を促す効果的な研修内容と日本赤十字社の「救護員としての赤十字看護師研修実施要項」を基に「看護職員キャリア開発プログラム」の一環として継続教育における災害看護教育計画を検討する必要があることが示唆されたと考える。

#### V. 結 論

- (1) 卒後1～3年目看護師における災害看護への認識に、経験年数別の差はなかった。
- (2) 対象者全員が、「災害看護研修は必要である」と回答したが、日常的な心がけや準備

は、ほとんどが実施していなかった。

- (3) 災害看護のイメージトレーニングと同時に、危機意識を高め、災害看護への動機を促す研修プログラム検討の必要性が示唆された。

### 引用・参考文献

- 1) 日本赤十字社：救護員としての赤十字看護師研修実施要項. 2003.
- 2) 浅海佳代, 児島二美子：災害看護研修の評価—過去4年間のアンケート結果の分析から—. 日本災害看護学雑誌, 6(1):54, 2004.
- 3) 山田チマ, 小川隆美, 他：災害看護に関する認識調査—全看護職員に対する質問紙調査より—. 日本災害看護学雑誌, 4(2):64, 2002.
- 4) 太田尚伸, 石田美由紀：災害活動における看護者の役割認識と行動の変化—過去2年の災害訓練からの分析—. 日本災害看護学雑誌, 2(2):73, 2000.
- 5) 徳川早知子, 宮松直美, 他：災害看護に対する看護職の意識. 日本災害看護学雑誌, 2(2):72, 2000.
- 6) 上甲貴江：職位別に比較した災害看護に関する意識調査. 日本災害看護学雑誌, 6(1):62, 2004.
- 7) 大島美智子, 壬生季代, 他：災害看護に対するK病院の看護師の意識調査—Eナースの役割と今後の活動に向けて—. 日本災害看護学雑誌, 6(1):61, 2004.
- 8) 鎌田美千子, 三澤寿美, 他：災害拠点病院に勤務する看護職者の災害看護に関する認識調査. 日本災害看護学雑誌, 5(1):51, 2003.
- 9) 原田久美子：災害医療に関する新採用職員看護婦の意識調査—新採用者研修に災害教育を導入して—. 日本災害看護学雑誌, 3(2):79, 2001.
- 10) 本山仁美, 坂口桃子：看護系大学生における災害認識について—主観的確率を用いて—. 日本災害看護学雑誌, 5(1):50, 2003.
- 11) 酒井明子：看護学生の災害に関する認識に影響する要因の検討. 日本災害看護学雑誌, 2(2):62, 2000.
- 12) 小田切宏恵, 浅沼宏子, 他：災害基幹拠点病院に勤務する職員の役割認識. 日本災害看護学雑誌, 4(2):65, 2002.
- 13) 尾谷智加, 丁野美智：災害救護研修の現状と今後の課題. 日本災害看護学雑誌, 6(1):55, 2004.
- 14) 大塚栄美：初動体制確立をめざした机上訓練の成果. 日本災害看護学雑誌, 6(1):70, 2004.
- 15) 平野美樹子：赤十字原則を適用させる災害救護演習—状況設定による学習効果—. 日本災害看護学雑誌, 6(1):80, 2004.
- 16) 水落清美, 須栗裕子：模擬患者に対しての医療者のコミュニケーションスキルの分析—日本赤十字社「災害時こころのケア」を指標として—. 日本災害看護学雑誌, 6(1):83, 2004.
- 17) 三谷智子, 白川太郎：看護師の災害救援派遣に必要な条件, 情報, 知識に関する調査. 日本災害看護学雑誌, 3(2):51, 2001.
- 18) 酒井富美, 堀内慈子, 他：災害看護研修の評価—研修前後の課題レポートの比較から—. 日本災害看護学雑誌, 3(2):50, 2001.
- 19) 鈴木由美, 原 玲子：新人看護師の災害看護に対する認識調査. 第8回北日本看護学会学術集会抄録集:73, 2004.